

未来を拓く科学大好き教育 通信

郷土博物館 特別研究員

指導課 特別指導員

岩波 英一

「理科室のおじさん」を尋ねて

日立理科クラブ・多賀正昭さん



その4 日立市立大久保小学校

大久保小「理科室のおじさん」多賀正昭さんは、南極越冬隊員として、3度南極の昭和基地に滞在した経験の持ち主です。最初は26歳の時、その後30歳、39歳の時に派遣されています。多賀さんの任務は、発電機や基地内の電気関係の保守点検などを主として行い、寒さとの戦いでもあったということ、思い出しながら話してくださいました。特に、3回目の派遣は、昭和基地の拡大構想5ヶ年計画の設営部門の担当を任され、構想計画に参画し、日立工場のディーゼル発電機の採用に一役買ったそうです。

日本人のスタッフが、昭和基地の南極観測で初めてオゾン層の変化に気づき、その日本の観測データがベースになって、アメリカの科学者が論文を発表し、ノーベル賞を受賞したと

いうエピソードを伺いました。「昭和基地のデータを活用して日本人が論文を発表すれば、そのことが大きな業績になっていたと思います。」と、残念そうに話していました。

思い出に残ることは、地図に表されていない誰もまだ踏み込んでいない南極の地を、調査隊と一緒に探索したことで、ワクワクするような不思議な気持ちで強く印象に残ったそうです。また、ペンギンやアザラシは人間を恐れないし逃げないそうで、とても愛嬌を振りまく動作などに心が和んだそうです。夏場は、氷に穴を開けて、魚釣りができることが楽しみで、ハゼの仲間がたくさん釣れ、ハゼを生きたまま生簀で飼い、食料として塩焼きや天ぷらにして食べた味がとてもおいしかったそうです。若い頃から山が好きで、

オーロラと氷山
(多賀さん撮影)



日本100名山をすべて踏破したそうですし、ヨットも62歳の時に、1年以上かけて日本一周に成功したということですからすごいことですね。

今、「理科室のおじさん」として力を入れているのは、現状の理科室の配置を確認し、備品等の点検作業と清掃を主に行い、器具の管理や保管場所の再配置を検討しているとのことでした。これから徐々に、授業で使う教材の準備や教具の製作なども行っていき、他の学校の「理科室のおじさん」の取り組みなども参考にし、子どもたちの役に立ちたいと話していました。多賀さんが、「学校に来ることで子どもたちの元気な姿に接し、

たくさん元気をもらえることがとてもうれしいことです。」と、話をしていたのが印象的でした。

多賀さんの多くの体験をぜひ子どもたちに語って聞かせてほしいと思いました。

南極観測船・しらせ
1983～2007

